

万葉図書・情報室だより67号

悲劇の皇子 有間皇子

『万葉集』には200首を超える「挽歌」が収められており、巻2の挽歌の部は有間皇子の歌から始まります。岩代の浜松が枝を 引き結び ますます 幸くあらば またかへりみむ

有間皇子(巻2:141)

―岩代の浜松の枝を結びあわせて祈り、もし無事であったら、またやってきて見よう。―

古代史において悲劇の皇子として知られる有間皇子は孝徳天皇の皇子として生まれました。中大兄皇子(天智天皇)や大海人皇子(天武天皇)とはいとこ同士の間柄です。父・孝徳天皇は中大兄皇子と不仲になり、失意のうち有間皇子が15歳の頃に亡くなりま

す。有力な皇位継承者となりえる存在は中大兄皇子にとって目障りなものであったと思われます。それゆえ、中大兄皇子の目を欺くために、有間皇子は狂人のふりをしたといえます。

飛鳥に留まった有間皇子は蘇我赤兄に

そのかさね謀反の計画を立てます。

しかし、赤兄の裏切りにより捕らえら

れ、行幸先の牟婁の湯(現在の白浜町)

に送られます。冒頭の歌はこの護送の

往路の途中、岩代(現在のみなべ町)

で詠まれた歌だとされます。

古来、「結ぶ(結び)」という行為は

命の無事を祈って、靈魂を草や木に結

び込める呪術的な意味を持ちました。

有間皇子も松の枝を結ぶことで自分の

命の無事を願ったのでしよう。ただ、

この先の自分の運命が分かっていたよ

うにも思えます。それでもかすかな望

みを抱かずにはいられない、そんな悲

痛な気持ちで伝わる歌だと思えます。

願いもむなしく、尋問された帰路、藤

白の坂(現在の海南市)で刑に処され、

19歳でその生涯を閉じます。

後の歌人らが紀の国を訪れた際に、

岩代の浜松を見て有間皇子を偲ぶ歌を

詠んでいます。

後見むと 君が結べる 岩代の小

松がうれを また見けむかも



有間皇子神社



藤白神社



伝有間皇子墓



地理院地図



熊野古道 藤白坂入り口



岩内1号墳…被葬者に有間皇子が挙げられている

―後でまた見たいと思って皇子が結んだ、岩代の小松の枝先を、また見ただろうかなあ。―

この歌が詠まれたのは有間皇子の死後43年も経つてからのことです。それだけこの事件が当時の人々にとって衝撃的なものであり、多くの人々の同情を集めるものであったからこそ、悲劇として人々のあいだで伝承されてきたといえるでしょう。

毎年、有間皇子の命日とされる11月11日には、藤白坂近くにある藤白神社内の有間皇子神社において、慰霊祭が行われます。今でも彼の生涯や歌は多くの人々の心の中に生き続けているのでしよう。

(司書 藤原文代)

※万葉歌及び口語訳は「万葉百科」による。

〈主な参考文献〉

『有間皇子の研究』

(三間重敏著/和泉書院)

『萬葉集の歌人と作品 上』

(伊藤博/塙書房)

剝 閑 寮 肉

図書室のご利用は無料です。

開館時間：午前10時～午後5時半

休館日：月曜日(祝日の場合は翌平日)

コピーサービス：白黒 1枚10円

カラー1枚50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥10

0744・54・1850(代)